

兆し2例 1 Web3と公共性 8

23年10月16日号より

(や＝山田 学)〔☆★☆兆し2例★☆☆☆山田 学は、この9月17日に、あるお方に、次のお手紙を読んでいただき、3部パンフレット〈ヤマト平民会議への想ひ〉

<http://www.jomaca.join-us.jp/omoi.pdf>

〈地球公会への道〉

<http://www.jomaca.join-us.jp/michi.pdf>

〈地球人の無知を知れ！〉

<http://www.jomaca.join-us.jp/shire.pdf>

を、手渡しいたしました。]

(9月17日付お手紙より)〔資本制社会は、とくに、米国と中国が、一蓮托生として、衰退してゆくことは、もうはや、時間の問題ではないでせうか。

今この時機、世界の大調和のためにこそ、その社会伝統において、もっとも豊かな準備蓄積を潜在させてあるのが、わが足元の、日本社会ではないでせうか。

この豊かな準備蓄積を、死守するためにこそ、日本国統治(外交・通商貿易・金融政策・軍事・治安警察)の自立と強化が、急務です。(中略)

一方、このわたくしは、1972年より、資本制社会の問題はどう解決されうのか、ど

の立場にもとらはれず(＝孤高の活動として)、縦横無尽に、追究してまゐりました。

日本民族・民俗の和の精神も、継承・発達させつつ、〈もうひとつの公共〉を構築してゆく道こそを、結論してをります。(中略)今のマス・メディアの風潮とは、正反対の結論ですから、発表をまったく、遠慮してをりました。が、いよいよ、機も熟したと、判断させていただきまして、この6月以降、もっとも簡潔な、3部のパンフレットとして、集約いたしました。(ヤマト平民会議といふ呼称にて)

(中略)

ここに、〇〇先生にも、進呈させていただきます。ぜひとも、これをめぐる自由討論にも、ご参画いただけましたならば、この上ない喜びでございます。]

(や)〔まもなく、米国と中国が、一蓮托生として、衰退してゆくと、強く予想されるなか、では、地球にて、〈次の社会〉を、どう創るべきか？ どこからも、まともな構想が、出てこない。ここにおいて、山田 学が、高校2年生時から蓄積してきた、独自の思想・学問(＝ある意味、日本人離れもした、悠久壮大な構想ではありますが…)を、役に立てただけなのでないか。少くともわたしの胸のうちにては、さう、強く信じてをります

このあたり、とくに家計などを安定させることに、ていねいに神経を使ふ、女性といふ存在には、とても理解しにくい、男性といふ存

在にありがちな、乱暴な冒険にすぎないと、映るのかもしれませんが……

未来を開拓するには、すでに現在、未来への兆したる動きが、存在してゐるのではないかと、探検することが、必須です。今回ここでは、山田が未来への兆しと考へる、2例のみを、ご紹介いたします。

とくにこれから数年間こそは、日本国統治の自立と強化が、必須です。が、超長期にて、世界の大調和のためには、国家といふ存在の限界をも、問題とさせていただく。さういふ、〈脱国家〉の立場に、わたしどもはたちます。なら、民間にて、〈脱国家〉の組織を創る、それへの兆しは、あるだらうか。〈脱国家〉の、民間からの〈もうひとつの公共〉は、実は、チェーンストア産業の延長線上に、ありうるのではないか。人民の健康平和への潜在需要は、なにか。その潜在需要にとつての、有効な供給、すなはち、最高品質かつ最低価格を、どう追求できるか。優れたチェーンストア産業は、すでにこの問題解決をしてゐる領域に、入つてゐると思はれます。

今の地球にて、専制国家と国民国家の対立が、問題となつてゐます。未来へ向け、指導者が、思索と情念にて先導する。民衆が、それを修正する。かういふ、〈先導修正〉が、専制国家と国民国家の対立をも、止揚(内容は保存し、形式は否定)してゆくのではないか。この〈先導修正〉の、事前の萌芽としてこそ、わたしどもは、アメリカの商業経営のサム・

ウォルトンから、学びました。チェーンストアの雄たる、ウォルマートは、顧客の時流に適合しつづけるべく、顧客にその時点にて有益な安さへの感動を、提供しつづけるべく、会社指導部による先導を、現場の従業員（アソシエート＝事業仲間と呼ぶ）が、修正する。現場感性を、尊重し、商業恐慌を、未然に防ぐ、未来型組織でもあります。

参考書の代表は、次です。

吉田繁治『ザ・プリンシプルサム・ウォルトンが実践した経営の成功原則100』（商業界2009年）
<https://www.honyaclub.com/shop/g/12601319>

この著の巻末資料「ウォルマートの60年の技術と組織および店舗発展」の、1979年（サム・ウォルトン61歳）の項を、山田なりに要約します。]

（1979年項要約）〔労働組合問題が発生した。以降、現場へのエンパワーメント（権限の委譲）を図る。「店舗の中の店舗の経営者が、部門マネジャーだ」と、位置づける。本部は現場に命令するのではなく、現場マネジャーを支える。日本の、現場が発注を行ふコンビニエンスストアと、現場主導Q Cのトヨタ式の経営を、サム・ウォルトンはヒントにした。ただし、基幹業務にコンピュータをどこよりも早く使ひ、現場に任せても、標準化などが可能であつた。他方、日本は、本部から方針といふ枠をつくらない、現場への包括委任のため、小売業の生産性が低下してゐる。〕

（や）〔サム・ウォルトンが、日本の現場こそを、ヒントにした。わたしはここを読み、川喜田二郎師の『KJ法渾沌をして語らしめる』（中央公論社1986年）

<https://www.honyaclub.com/shop/g/10364918>

の内容を、再確認しはじめました。すると、何度も読み慣れたはずの、川喜田師の一語一句が、今までになかつた手応へをもつて、響いてまゐります。この著が発行されてから37年、やうやく、わたしのうちにて、この著をまともに活用させていただく、諸準備が済んだのでせうか。川喜田二郎師の民族地理学とKJ法が、山田が未来への兆しと考へる、2例めです。

川喜田師の立論は、一般に、問題解決には、どういふ過程的構造が、あるか。その本質は、〈判断→決断→執行〉であるが、日本発にて地球のために、問題解決運動（判断→決断→執行のくりかへし）を、創始されたのではないか。そして、〈判断→決断→執行〉のうち、判断の過程については、西欧による近代化さへも、まともな技法を、準備できてゐないから、ご自身が、狭義のKJ法（川喜田二郎法）を、創始されました。

狭義のKJ法を、わたしなりに、規定させていただきます。

狭義のKJ法は、渾沌な現象から秩序ある構造へ予想する、研究事務技法です。

世界のあらゆる分野について、これを適用できますが、とくに、（社会的に生産されてゐ

る）民衆の情念と思索について、これを適用すると、日本民族の伝統風な衆智活用を、技法としてより体系化するものとなります。日本流の現場を活す智恵、サム・ウォルトンが、彼なりに吸収したところを、より体系化するものとなります

わたしの半生は、川喜田師に学ぶまま、次の3つの問題解決運動です。

①資本制社会のあらゆる問題を解決してゆく。

②実父・山田俊郎が^{としを}開拓した「TQ技術」を地球社会に活用するため、あらゆる問題を解決してゆく。

③ ①②といふ未来派の生活にて自身の資金繰りを維持するため、あらゆる問題を解決してゆく。

〈判断→決断→執行〉のうち、判断の過程にて、重要なのが、川喜田師がまとめた、「探検の五原則」です。五原則の第一が、「360度の視角から」取材せよ、です。わたしはこのままに、上記①の問題解決については、「右翼系から左翼系まで」「科学から宗教まで」「学者から民衆まで」、50年間以上、取材してまゐりました。それらの豊かな裏づけがあるからこそ、資本制社会の〈次の社会〉についての、山田構想には、自信がございます。が、この山田構想を、今はまだほとんどの方がたが、信用できぬから、冒頭にお示しした、3部パンフレットのうち、〈地球公会への道〉の副題を、〈未来の現実の人民らへの信仰〉

と、させていただきました。サム・ウォルトンが、片田舎の小さな店舗として、ウォルマートを創業した時、彼ひとりには、絶対的な自信が、あつた。が、これがのちの、地球一のチェーンストア産業の創業なのだと、信用できる人は、だれもゐなかつた。未来を創る実行は、事業者の信念ないし信仰から、はじまる。わたしはこのことも、サム・ウォルトンに学び、わたしにおいてはじめて、〈信仰〉といふ語を、用ゐさせていただきました。

上記②の問題解決について。

〈氣功を工業化する〉TQ技術の産業！は、西暦2100年まで、つづく… それほどに、個人から地球まで、諸分野への応用可能性を、想定してをります。

山田俊郎永眠後、TQ技術運動は、主に、分業体制でした。山田 学は、西暦2100年を念頭に、学問化と社会化の準備を続けた。時どきの営業については、自主的に志願される方がたを中心に、大きくお任せした。それで、かなり隆盛した時期もありました。が、山田による上記根本準備が、まともに活かされてゐたわけでもない。また、山田 学がお任せした人事判断に、一定の誤りもありました。ので、たまたま今は、TQ商品が買へる窓口が、少い状態です。

TQ技術運動の、さまざまな時期の、さまざまな営業を支へてくださった方がたに、感謝申し上げますとともに、いよいよ、営業と根本準備のまともな協業として、『氣功の工務店』

サイト <https://tsugie.net> を、開設いたしました。本日10月16日は、わたしからは偉大と思はれる、山田俊郎の、27年めの命日でもございます。

なほ、上記③の問題解決に関し、ある資産を売却しつつあります。山田 学の半生を〈良し〉とご理解くださり、特別にお買ひ上げいただける方も、急募いたしてをります。]

23.7.11.より

(や) [☆☆☆Web3と公共性☆☆☆大手銀行員で、ある政治団体の関係者から、次の本を、紹介されました。中島 聡^{さとし}『シリコンバレーのエンジニアはWeb3^{ウェブスリー}の未来に何を見るのか』(SBクリエイティブ2023年1月)

<https://www.honyaclub.com/shop/g/g20725163> 。話題のWeb3について、その明暗を、冷静に、書き分けてをられます。(実は、暗の部分も多い!) 中島 聡氏は、たとへば、結果として、あの「Windows95」「Windows98」開発の、中心にをられたなど、本質的なエンジニアです。その中島 聡氏が、いよいよ、Web3についても、みづから、プログラム・コードを書かれつつ、参入され、この分野について、本質展望をなされた。わたしどもはこれを、良書として、歓迎いたします。以下、「暗号資産」「暗号通貨」「NFT」「スマートコントラクト」「ブロックチェーン」「DAO」「トークン」などの、Web3用語について、ここでは、説明を略させていただきます。]

(『…Web3の未来に…』206～207ページより・原文の強調部分に を付した。) [本当の意味で価値のある、社会にとって不可欠だといえる、そんなWeb3アプリケーションはまだ登場していません。暗号資産やNFTによる資金調達ができるようになったのは画期的なことではありますが、マイナス面も多いのは、ここまで述べた通りです。だからといって、Web3には意味がないと考えるのも早計です。

誰にでも情報にアクセスできる透明性と、管理者がいなくても動き続ける永続性、そしてスマートコントラクトの自動処理による厳密性。

これらの特徴をすべて兼ね備えた仕組みは、今のところWeb3以外には存在しません。

そう考えていくと、Web3が本質的な意味で最もその力を発揮するのは、国や自治体がかかわる公的な分野であると私は考えています。]

(同208ページより) [国の根幹にかかわる事柄こそ、Web3を活用すべき分野だといえます。もっとも、今Web3を推進しようとしている政府関係者が、自分たちのクビを絞めるかもしれない透明化を今後力強く進めていくかどうかは疑問ですが。また、無理矢理にWeb3を使ったシステムを官公庁に導入したとしても、透明化の文化が根付いていないのであれば、結局従来通りブロッ

クチェーン外の根回しで物事が決まってしまうだけかもしれません。

しかし正直なところをいえば、すでにシステムの確立された国がWeb3に移行することは相当に困難だと思われます。

逆にいえば、小規模な新興国であれば国家システムをWeb3で作ることもできるのではないかと私はそう期待しています。]

(同213～214ページより) […ようやく見えてきたのは、非営利法人とNouns型(註…Nounsと称するDAOが開発した型)のトークンを活用したインセンティブモデルの組み合わせです。

サービスを運営する主体は、NPO、NGOなどと呼ばれる非営利法人が行ないます(日本では、「非営利型の一般社団法人」です)。そこが「社会に価値をもたらす」というビジョンの元にプロジェクトを立ち上げ、開発者集団とスマートコントラクトで契約を結ぶことによって、生み出したサービスを社会に提供するので。

開発者集団への報酬の提供の仕方は、Nounsのように発行するNFTの一部を渡すものでもよいし、売上の一部を渡すものでも構いません。

大切なことは、開発者のインセンティブを非営利法人の目的と一致させることです。その設計さえしっかりとできており、かつ、スマートコントラクトによって自動化されていれば、開発者たちは、そのサービ

スの成功のために懸命の努力をし、Win-Winの関係を築くことが可能になるのです。]

(同215ページより) [私は、こんな形で数多くの非営利法人が立ち上がり、そこにかかわる開発者たちが、発行されるトークン(NFT+暗号通貨)の形で報酬を受け取る世界こそが、「来るべきWeb3の世界」であると思うし、それを実現してこそ、「Web3の時代になっても、新たなGAFAMに力が集中してしまう時代」を防ぐことができると考えています。]

(や) [わたしはこの、中島 聡氏による、本質的提案に接し、ICTとはまったく無関係に、わたしが若いころから、在野の国家論者・滝村隆一師(1944～2016)に学び続けてゐることが、強く結びつくかもしれぬと、直観しました。(師の著は、『国家論大綱 第一巻 上・下』勁草書房2003年、『ニッポン政治の解体学』時事通信社1996年など。)

ブロックチェーンといふ技術を土台とする、Web3は、中島氏が指摘されるやう、透明性・永続性・厳密性といふ特徴があります。これは、<ほんものの公共性>にこそふさはしい、特徴ではないでせうか。

地球の現状は、とくにこの数年間、<ほんものの公共性>とは、正反対の方向に、動いてゐるのではないかと。ダヴォス会議を主催する、世界経済フォーラムなどが、いびつな地球統制を、助長しようとしてゐる。近代科学は、実は、人間や他生物の生命について、人間に

よる世界認識について、人間が諸民族性に分化したことについて、理解が、薄い。世界経済フォーラムなどは、その近代科学の弱点のままに、19世紀以降の、化学や、20世紀以降の、遺伝子工学や、計測制御技術などに、とらはれ、いびつな地球統制を、助長しようとしてゐる。その裏に、特定大企業群の資産増殖欲も、見え隠れする。

このいびつな地球統制に、対抗すべく、〈諸個人の自立と協同。やがてはやがては、諸民族の自立と協同。〉を、志向する勢力が、増えてゐる。米国のトランプ前大統領や、ロバート・ケネディ・ジュニア氏への、熱烈な支持(日本では、あまり報道されてゐない。)は、その一環です。日本社会にても、参政党といふ新政党が、興隆しつつあります。(同党代表の松田^{まなぶ}学氏が、Web3応用の「松田プラン」を、提唱してもゐる。)

米国社会も、中国社会も、根本破綻の懸念があるなか、日本国統治(外交・通商貿易・金融政策・軍事・治安警察)の、自立と強化が、喫緊の課題です。

以上を、今の大前提として、先に言及した、在野の国家論者・滝村隆一師に、学び続けてゐることです。そもそも、国家といふ組織は、どういふ必要と必然により、成立し、今も存続してゐるのか。これについて、学界の諸都合にとらはれず、まったく自由な在野の立場から、総合解明した学者を、滝村隆一師以外に、わたしは知りません。今のところ、ICT

ないしWeb3にとっては、まったくの外野である、滝村国家論を、強く参照してこそ、中島 聡氏が、さしあたり試行してをられる、非営利法人Web3も、本質的に、生きてくるのではないか。すなはち、〈ほんものの公共性〉とは、なにか、です。

わたしが昨年6月に、JOMONあかでみいサイト「店頭」画面にて、公開させていただいた、〈超然の想ひ地球協同社会へ〉

表紙 http://www.jomaca.join-us.jp/chikyu_fine.pdf

本文 <http://www.jomaca.join-us.jp/chikyu.pdf>

の本文より、次の部分はとくに、滝村隆一師に学んだことの、精髓です。]

(〈地球協同社会へ〉本文1ぺより) [議会議制民主主義の、国民国家も含め、国家は本来、諸部族の闘争、諸民族の闘争を、調整するための組織です。次に、資産階級の闘争を、調整するための組織です。つまりは、闘争の存在が、前提となつてゐる、組織です。

〈脱国家〉といふ、認識転換こそが、地球協同社会への、入門です。

闘争から、調和へ。

諸民族調和と、資産循環。民間からの、これらへの、規範が、地球協同社会への規範です。民間からの、〈もうひとつの公共〉です。

そして、この数千年の、諸国家といふ規範から、無理なく、無駄なく、^{けだつ}解脱してまゐります。]

(や) [わたしがこの論文を書いた当時は、Web3入門の本さへ、読んでをらず、今この文章にて書いてゐることを、想像だに、してゐませんでした。が、もしもこの論文が、中島 聡氏らによる、Web3本質試行にも、生きてくるなら、この上ない喜びで、ございます。この論文から1年後、今年6月に、JOMONあかでみいサイト〈健康平和研究〉画面にて、公開させていただいた、

〈道徳復興ヤマト平民会議への想ひ〉

<http://www.jomaca.join-us.jp/omoi.pdf>

は、〈地球協同社会へ〉といふわたしの試行のうち、まづは、道徳協会運営のための、文章です。山田 学の、もっともまじめな部分でございます。暗号資産、有価証券、有価固有データなどが、自由化民衆化されてゐると、考へられる、Web3。それにとりまふ、人間心の暗黒の部分も、ひと通り経験した今、わたしどもからは、〈道徳復興ヤマト平民会議への想ひ〉こそを、提出させていただきます。中島 聡氏が、この著の「おわりに」の末尾に書かれた、本質的なエンジニアとしての決意に、感動いたしました。]

(『…Web3の未来に…』318ぺより) [Web3バブルが崩壊し、冬の時代に入ったことは、むしろよかったと思っています。

ベンチャーキャピタルからの資金がポンジスキーム (註…後から参加した人が投資したお金を、先に投資した人に配当として渡してしまふ投資詐欺) で回しているような

会社が淘汰され、その後で、Web3を使って社会に対する価値を追求しようとするビジネスが生れてくる。

そんな未来のために、私は今コードを書いています。]

(や) [わたしどもは、究極は、〈脱国家〉の立場ですが、ただし、人間社会全体史の水面下にて、実は、わが日本民族の (ひろい意味の) ご皇統が、また、欧州のハプスブルグ家などが、最重要のご活動をなされてきた事実について、重く重く、受け止めさせていただいてをります。これを大前提とし、日本国の新しいあり方についても、追求させていただきます。ここに言及した、水面下の事実については、落合莞爾先生による諸著作・DVDなどを、参照のこと。]